

キラリ
光るまち

伝承遊びの“お手玉”で

「ぬくもりのある心豊かな」

まちづくり

日本のお手玉の会 事務局

武田 信之



沈滞したまちをお手玉で

四国屈指の工業都市といわれてきた新居浜市は、昭和50年代後半の構造不況で、商店街はシャッターを下ろし、市民は元気をなくしていた。そのとき、市民の手でまちを元気にしようと、新居浜アメニティ倶楽部が誕生した。昭和60年のことである。

倶楽部では、まちの活性化に向けて、新居浜市の過去・現在・未来を考え、自分たちができることに取り組み、市への提言も行った。その中に、未来を託す子どもたちに、市の歴史や文化を語る活動があった。その際、昔遊びも一緒に紹介したが、お手玉にことのほか興味を示したので、お手玉遊びについて調べた。



子供たちはお手玉にことのほか興味を示した

「隔世伝承」のお手玉遊び

お手玉は手作り。おばあちゃんから孫へ伝えられた「隔世伝承」の遊び。そこには世代を超えた語りがあった。おばあちゃんは、孫にお手玉を作ってやりながら、裁縫の基本を教え、礼儀作法、昔話なども一緒に伝えた。それは、いまの社会に欠けているものだった。お手玉遊びを活動の中心におくことにした。昭和63年のことである。

市内のイベントに、お手玉の材料を持って出かけた。そこには、お手玉作りをとおして、知らないおばあちゃんと子どもたちの、ほのぼのとしたふれあいと笑顔があった。お手玉の普及が、世代交流に役立つことを確信した。

70年ぶりのお手玉に涙

お手玉を持つて老人ホームを訪ねた。80歳過ぎのおばあちゃんたちは、「もう70年、お手玉はしていない」という。しばらくお手玉に触れていたが、やおら立ち上がり、「一番はじめは一の宮」と歌い、3個のお手玉が宙を舞った。

ひとしきり、お手玉を楽しんだおばあちゃんたちは、「お手玉のことはすっかり忘れていた。でも、体が覚えていてくれていました」と、涙を流した。

そんなことがあって、平成4年に、新居浜アメニティ倶楽部と23のボランティア団体の協力で、第1回全国お手玉遊び大会を新居浜市で開催した。それを機に、新居浜市に本

部を置く全国組織の日本のお手玉の会が誕生した。

お手玉の標準化とルール化

その後、日本のお手玉の会では、昨年（第16回）全国お手玉遊び大会まで、新居浜市で12回、県外で4回の全国大会を開催。海外遠征は18回を数え、野外伝承遊び国際大会に7回出場するなど、お手玉遊びの普及に努めた。現在、国内に44支部、海外に2支部、会員は千人を超える組織に成長した。

その間に、お手玉の標準化、遊び方のルール、審判規則、段位認定をはじめ、指導者の養成講座も行っている。

お手玉遊びは市民の『心』

こうして、お手玉遊びは、新居浜市民の間にも定着してきた。そのことは、平成19年に市制施行70周年を迎えての市の記念事業にみることもできる。

新居浜市は、世界に誇る3つの文化について、過去から現在に至る財産的価値を見つめ直し、未来へ伝えるための記念碑的な出版物として3部作を作成した。それは、「近代産業遺産」を『礎』、「太鼓祭り」を『誇』、「お手玉遊び」を『心』として

編さんされた。

『心』の「お手玉」は、新居浜発祥の全国お手玉遊び大会を通じた活動の歴史と人々のふれあい・交流をわかりやすくまとめ、やさしさとぬくもりを感じさせる冊子となっている。

日本初「寄せ玉遊び」の共演

昨年10月16日に、第16回全国お手玉遊び愛媛・新居浜大会を開催した。今回は、日本で初めて全国各地に伝わる寄せ玉遊びを持ち寄って共演し、ビデオにも収録した。また、お手玉講演会「うつ病は『お手玉』で治す」も開催した。

翌17日は、大会参加者に、近代産業遺産の「東洋のマチュピチュ」の探訪、太鼓祭りの

「二宮の杜ミュージアム」の太鼓寄せの観覧など、市内観光にも参加してもらった。これらの行事に、北海道から沖縄県まで22の都道府県から、700人の参加があった。

お手玉甲子園と世界大会を

これからの夢は、「お手玉甲子園」と「世界お手玉遊び大会」を、新居浜市で開催すること。「OTEDAMA」を世界共通語にすること。この夢を、新居浜市民のみなさんの協力、支援で実現させたい。

「心豊かなまちづくり」に貢献し、お手玉の輪と笑顔が、地球上に広がり、平和な世界になることを願っている。

（日本のお手玉の会元会長・現顧問）



第16回全国お手玉遊び大会の「投げ玉競技の個人戦」



南予地方に伝わる寄せ玉遊びを披露する西予市のみなさん



兵庫県養父市に伝わる石を使って遊ぶ寄せ玉遊び「石なんご」の実演